

伝鴨長明筆『伊勢瀧原社十七番歌合』断簡

——西行最晩年の自歌合『諸社十二卷歌合』か——

久保木 秀 夫

要 旨 杉谷寿郎氏ご所蔵の未詳歌合断簡一葉を紹介する。「伊勢瀧原社十七番哥合」という内題を持ち、鴨長明を伝称筆者とする当該断簡は、『玄玉集』所収の西行詠一首を含むなどの諸点から、散逸したとされる西行最晩年の自歌合『諸社十二卷歌合』の一部である可能性が高いように思われる。

—

杉谷寿郎氏ご所蔵の断簡に、次のような両面書写の一葉がある。

（オモテ）

伊勢瀧原社十七番哥合

一番

左

權司

1 ナカレイテ、イハマヒ、カ斯塔キツセハイイス
、ノカハノワカレナリケリ

右

少司

2 ナミトミエテヲハナカタヨルタキノハラニ
松ノアラシノヲトナカルナリ

二番

左

八幡ノ放生會ニマイリタリケルニヨニイリテ
コトハテ、シツマルホトニカヘラセヲハシマシケ
ルコトカラヒルノケシキニモニスアハレニヲホ

ヘテヨミケル

(ウラ)

3 カヘリマスミチノヲクリノサヒシサハアリツル
ニハノコ、チャハスル

右

4 アラ人ノカケヤハラクルシメノウチハツネナキ
コトノワサヲマネヘル

三番

左

月ナニヲヒテクマナカリケリ放生^ヲ河見^テ遣

5 ハナタレテモナクウキヌルイロクツノ

カスミユハカリスメル月カナ

右

6 ヒサカタノ月ノミヤコノウチハシモ

タチカクルヘキクマハアラシナ

四番

左

7 モ、シキニハルタツソラノカスメルヲニハ

ノヒタキノケムリトソミル

縦十五・五cm、横十四・八cmのもと枳形本、料紙は薄手の楮紙である。極札は付されていないが、その代わり、

正筆 明

一 加茂長命

片カナ

伊勢瀧原

哥切

ナカンイテ、

廿二

という付属紙片がある。ここにいう伝称筆者の「加茂長命(明)」とは、鴨長明のことであろう。伝長明筆の断簡としては、これまでに三種四葉の古今集切が知られている。すなわち①京都国立博物館蔵手鑑『藻塩草』⁽¹⁾所収の土佐切、②細川家永青文庫蔵手鑑『墨叢』⁽²⁾所収、及び田中登氏蔵所蔵の六半切、③久曾神昇氏『古筆切影印解説 I 古今集編』⁽⁴⁾所収の片仮名切、である。③のみならず①②もまた片仮名書きであるが、しかし当該断簡を含め、いずれも同筆とは認め難いようである。もともと①と③、また②と当該断簡とは、それぞれ筆跡が、どことなく通じているように思われる。書写年代は、当該断簡に限って言えば、鎌倉中期頃であらうか。ツレの存在は、現時点では確認できない。

それにしても、一見して奇妙な歌合である。内題には「伊勢瀧原社十七番哥合」と記されているが、このような名の歌合は、現在のところ管見には及ばない。開催年次もちろん不明。よって「權司」「少司」なる作者二人に関しても、人物比定は不可能である。もともとそれは、年次不明のせいばかりでもない。そもそも「權司」「少司」という作者名表記自体が、説明不足に過ぎるのである。さて一方、歌内容について見ていくと、完本時には十七番まであ

(便宜上、私に歌番号を付した)

つたというが、この断簡に残されているのは、一番から四番左の計七首のみ。そのいずれの歌にも、歌題や判、あるいは判詞といったものが見られない。その代わり、オモテの終わり四行と、ウラの前から八行目には、歌より一字下りの文章が記されている。その内容からして、どうやらこれは、それぞれ3と5の歌にかかる詞書のようである。歌合中の歌にこのような、詠作事情を示す類の詞書が付されるというのは、一体どういうことなのか。しかしそうした疑問もさることながら、それら以上に問題だろうと思われるのは、当該断簡七首のうちの2の歌が、『玄玉集』⁽⁵⁾に、

題不知

円位法師

浪と見えて尾花かたよる滝原に松の風の音ながるなり（巻七・草樹下・六六九）
という「円位法師」すなわち西行詠として見えることである。

二

『玄玉集』については松野陽一氏に詳細な論がある。⁽⁶⁾それによると、まず伝本は国立歴史民族博物館本（高松宮旧蔵本、略称Ⅱ歴）・彰考館本（彰）⁽⁸⁾・群書類従本（類）の実質三本、「九条家に極めて近く、崇徳院・西行・俊成に親近感を懷く人物」による撰定であり、「建久二年に一応成立し三年には推敲・補訂の段階にあつた」という。建久二年（一一九二）と言えは西行が入寂した翌年だから、その点資料的な信憑性は極めて高いとみられよう。ただ松野氏も指摘しておられるように、「玄玉集」の「円位法師」表記には諸本間に異同があつて、それが若干問題となる。具体的に示せば次のとおり。

三七作者 円位法師（歴・彰・類）

- 七八作者 円位法師（歴・彰・類）
- 一〇一作者 円位法師（歴・彰・類）
- 一六八作者 円位法師（歴・彰）——因位法師（類）
（因位）
- 二一六作者 円位法師（歴・彰・類）
- 二四三作者 ナシ（歴・彰）——円位法師（類）
- 二四九作者 円位法師（歴・彰・類）
- 二六一作者 円位法師（歴・彰・類）
- 三二〇作者 円位法師（歴・彰・類）
- 三五一作者 円位法師（歴・彰・類）
- 三九六作者 円位法師（歴・彰・類）
- 四二七作者 円位法師（歴・彰・類）
- 四五七作者 円位法印（歴・彰）——円位法師（類）
- 四七一作者 円位法師（歴・彰・類）
- 五七二作者 円位法師（歴・彰・類）
- 五九三作者 因位法師（歴）——円位法師（彰・類）
- 六四九作者 ホノマミ 因位法師（歴）——円位法師（彰・類）
- 六六三作者 因信法師（歴）——円信法師（彰）——円位法師（類）
- 六六九作者 ホノマミ 因位法師（歴）——円位法師（彰）——円信法師（類）

六八六作者 因位法師オウミ（歴）——円位法師（彰）——円信法師（類）

六九〇詞書 因位法師オウミ（歴）——円位法師（彰・類）

六九七作者 因位法師オウミ（歴）——円位法師（彰）——円信法師（類）

七二三作者 因位法師オウミ（歴）——円位法師（彰・類）

このうちゴシック体とした箇所には、何らかの異同が存する。最も多いのは「円位」「因位」「円信」「因信」の混乱で、問題の「浪と見えて……」の歌（六六九）もそうである。しかしながら、そうした異同を持つほとんどの例は、他文献によって西行を指すことが確認でき、よって「因位」「円信」「因信」は、明らかに「円位」の誤りであると考えてよいだろう。もっとも肝心の「浪と見えて……」の歌と、もう一首、

（中宮月次の御屏風に、草花の歌とて） 円位法師

萩が枝の露に心のむすばれて袖にうらある秋の夕露（巻七・草樹下・六四九）

という歌については、現在のところ『玄玉集』だけにしか見ることができない（もちろん例の断簡を除いて、である）。そのため松野氏や、古くは伊藤嘉夫氏は、⁽⁹⁾前者を一応の存疑歌とする慎重な態度を採られたが、しかしそのうちの前者は彰考館本で、また後者は彰考館本と類従本で、それぞれ「円位法師」となっている。そうした点からすれば、やはり他例と同様に、西行のことと認めて差し支えないように思う。久保田淳氏編『西行全集』⁽¹⁰⁾でも、これらの二首は西行詠として、問題なく扱われているようである。

さてそうすると、その「浪と見えて……」の歌を収める『伊勢滝原社十七番歌合』は、とにかく何らかの形で西行に関わりのある歌合だったと考えて、まずは間違いないことになる。

三

ところで慈円の『拾玉集』には、次のような全十二首から成る歌群が見られる。

文治六年二月十六日未時、円位上人入滅、臨終などまこと

にめでたく、存生にふるまひ思はれたりしに、更に違はず、

世の末に有り難き由なん申し合ひけり、其後詠み置きたり

し歌ども思ひ続けて、寂蓮入道の許へ申し侍りし

君知るやその如月と言ひ置きて言葉におへる人の後の世（五一五八）

風になびく富士の煙にたぐひにし人の行方は空に知られて（五一五九）

千早振神に手向くる藻塩草かき集めつつ見るぞ悲しき（五一六〇）

これは、「願はくは花の下にて我死なんその如月の望月の頃」

と詠み置きて、其に違はぬ事を世にもあはれがりけり。又、

「風になびく富士の煙の空に消えて行方も知らぬ我が思ひ

かな」もこの二三年の程に詠みたり。これぞ我が第一の自

嘆歌と申しし事を思ふなるべし。又、諸社十二卷の歌合、

太神宮に参らせんと営みしを受け取りて沙汰し侍りき。外

宮のは一筆に書きて、すで見せ申してき。内宮のは、時

の手書共に書かせむとて、料紙など沙汰する事を思ひて、かく三首は詠めるなり。

朝夕に思ひのみやる瑞垣の久しくはぬもろ心かな（五一六一）

山川に沈みしことは浮かびぬるをさても猶澄む我が心かな（五一六二）

諸共にながむべかりしこの春の花も今はの比にも有るかな（五一六三）

返し

寂蓮

君はよし久しく思へ瑞垣の昔とならん身の行方まで（五一六四）

此間所勞大事にて、皆も御返事え申さず、「水がき」ばかり

を所勞述懷に寄せて申し候とてかくな。後日に所勞のび

のびに令和進とて五首送之

いさぎよくさぞ澄みぬらむ山河に沈むと見えて浮かぶ心は（五一六五）

思ひあまり身にしむ風もいかげせん花も今はの比となりなば（五一六六）

言ひ置きし心もしるしまどかなる位の山に澄める月影（五一六七）

たぐひなく富士の煙を思ひしに心もいかに空しかるらむ（五一六八）

伊勢の海にかき集めてぞ藻塩草終はり乱れぬえにはなりける（五一六九）

これは文治六年（一一九〇）二月十六日の西行入寂に際して詠まれた、慈円と寂蓮との贈答歌である。その解釈に

ついては、すでに松野氏が綿密に論じておられるので、¹¹⁾ここで繰り返すことはしない。今問題としたいのは、傍線部

によってその存在が初めて知られる、西行の「諸社十二巻の歌合」なる作品である。

早くこの記述に注目された伊藤嘉夫氏は、「諸社十二巻の歌合」を「十二社奉納の十二巻の自歌合」と解されて、「御裳濯河、宮河の両歌合のほか、今日傳はるものなく」散逸してしまったものと説かれた。つまり現存する『御裳濯河歌合』『宮河歌合』の両自歌合は、元来「諸社十二巻の歌合」の一部であったと見做されたわけである。ところがその後、久曾神昇氏は「御裳濯河・宮河歌合が」古来十二社歌合のうちであるといふが、最初からこの二社歌合以外には作られなかった」と伊藤氏の説を否定され⁽¹²⁾、また萩谷朴氏も「拾玉集にいう諸社十二巻の歌合とは、西行の自歌合とは関係なく、慈鎮ら自身の結構した歌合かと思われる」という見解を示された⁽¹³⁾。このように、一時は「諸社十二巻の歌合」の存在すら疑問視されていた中で、それが間違いなく西行最晩年の自歌合と考えられ、のみならず『御裳濯河歌合』『宮河歌合』とも浅からぬ関係にあったらしい、ということを明らかにされたのは、やはり松野氏であった。松野氏は、右のうち三首目の「千早振…」という慈田の贈歌と、それに対応する十二首目の「伊勢の海に…」という寂蓮の返歌、及び傍線部以下の記述（これは「千早振…」の歌についての左注である）に加えて、さらに『拾玉集』に見られる、

円位上人十二巻歌合の滝原下巻書きて遣すとて

大納言実家

こころざし深きに堪へず水茎の浅くも見えぬあはれかけなん（五三三四）

返し

こころざし深く染めける水茎は御裳濯河の浪にまかせつ（五三三五）

というもう一組の贈答歌の読解から、「諸社十二巻の歌合」について、次のように整理された（以下そのまま引用する）。

①西行の自歌合であること

②伊勢太神宮（の諸社）への奉納歌合であること

③「諸社」は、伊勢太神宮関係の「諸社」を意味すること

④その一社に内宮別宮の「滝原宮」が含まれること

⑤「諸社」は内宮と外宮が含まれること（この場合、④の存在から、両宮とも本宮のみを意味せず、場合によりては本宮を含まぬ「内宮の摂社」「外宮の摂社」を意味するかもしれない）

⑥外宮（或は外宮関係摂社）への奉納歌合は慈円が一人で執筆したこと

⑦内宮（或は内宮関係摂社）への奉納歌合は当代の名筆が分担執筆していること

⑧その一人に藤原実家があり、彼が「滝原宮の下巻」を担当していること

その上でまた松野氏は、『御裳濯河歌合』『宮河歌合』との関係についても検討を加えられた。その結果、「両者が同一の歌合であることは殆んどあり得ない」と一応は断りながらも、

それでは全く別の歌合かといえば、成立時期が重なっていることといい、（略）共に慈円が関係していることといい、同じ太神宮奉納という性格を有っていることといい、無縁とは考えられない。（略）「諸社十二巻歌合」は「御裳濯河歌合・宮河歌合」に次いで、一連のものとして伊勢の諸社に奉納さるべく慈円に依頼された、西行の生涯最後の事蹟だったと考えておきたい。当初から全体が結構されていたのではなく、宮河歌合の判詞が定家の手で最終的にまとめられるのと前後して、追加された企画だったのではないだろうか。そのために、彼が生を終える以前には、やっと外宮の分のみしか完成せず、その後には存在そのものを否定される「幻の歌合」となってしまったのではないかと思う。

と総括された。この松野氏の考察によって、『諸社十二卷歌合』の實在は大方の首肯するところとなった。爾来『諸社十二卷歌合』は、西行最晩年の最も注目すべき事蹟として、研究者の関心を集め続けているのである。

四

さて問題の断簡である。「伊勢滝原社十七番歌合」という内題を持ち、のみならず西行の「浪と見えて……」という歌一首を含むその断簡は、つまり以上に見てきた『諸社十二卷歌合』のうち、「滝原」に奉納されたという巻の、冒頭部分に当たるものではなからうか。もちろん、たった二葉分の断簡しかない現時点では、それはあくまで推測の域を出るものではない。しかしそのように考えてみた場合、当該断簡が抱えるいくつかの不審点についても、それなりに説明することが可能となってくるのである。

例えば作者名表記の問題。「權司」「少司」というその表記が、説明不足とみられることはすでに述べたが、要するにそれは、西行自身の仮名だったのではないか。周知のとおり西行は、『御裳濯河歌合』で「山家客人」「野径亭主」、また『宮河歌合』で「玉津島海人」「三輪山老翁」といった仮名を用いている。当該断簡の「權司」と「少司」についても、それらと同様のものと考えておけばよいだろう。

また例えば詞書の問題。通常の歌合作品において、詠作事情を示す類の詞書が付されることは、おそらく皆無に等しかろう。ところがそれには例外があつて、すなわち既存の歌を番わせた、いわば秀歌撰的な性格を持つ歌合作品の中には、詞書を伴うものが少なからず見出せるのである。具体的には『治承三十六人歌合』などが挙げられようが、また新古今時代以降盛んに撰せられていった、自歌合作品のうちのいくつかもそうであった。例えば西行の一連の自

歌合よりも若干遅れる、良経の『後京極殿御自歌合』の中には、

三番

左 文治六年女御入内の月次の屏風に、住吉の松に霞か
れる、書きたる所に

ながめやる遠里小野はほのかにて霞に残る松の風かな（五）

右 春の歌あまたよみける中に

氷りるし水の白浪立ちかへり清滝川に春風ぞ吹く（六）

といった例があり、また慈円の『慈鎮和尚自歌合』の中にも、

（小比叡十五番）

十三番

病に患ひける比 左

頼め来し我ふる寺の苔の下にいつしか朽ちん名こそ惜しけれ（五六）

世を厭ふ心深きよしなど語りし事を思ひ出でて、円位上人

が許へ遣しける 右勝

世を厭ふしるしもなくて過ぎ来しを君やあはれと三輪の山もと（五七）

というような例がある。そのほか『定家卿百番自歌合』などにおいては、「花月百首建久元年左大将家」（七番左・一三）

や「於先妣旧宅詠之」（八十九番右・一七八）といった詞書が、二百首すべてにわたって見られる。これらからして明らかのように、歌合の歌に詞書が付されることは、自歌合作品に限って言えば、決して珍しい事例ではなかったの

である。従って当該断簡が、『諸社十二卷歌合』という自歌合であったとすると、そこに詞書が存するという問題も、きれいに解決するわけである。

これから判断する限り、当該断簡が『諸社十二卷歌合』だったという可能性は、かなり高いと言えそうである。ちなみに松野氏の「憶測」によれば、『諸社十二卷歌合』には「勿論、判詞の付される暇はな」かったという。一方当該断簡には、確かに判や判詞の類が見られない。例えばそうした点なども、右の傍証たり得ようかと思われる。

五

ただしそのように考えてみて、まったく問題がないわけでもない。『拾玉集』の「滝原下巻」という記述によると、元来「滝原」奉納分には上下、もしくは上中下といった複数巻が存したらしい。ところが当該断簡は、二でも三でも割り切れない「十七番」の歌合である。そうすると、「伊勢瀧原社十七番歌合」そのものが分割されていたわけではなく、この歌合と共に上（中）下を構成するような、別の滝原歌合があったということになるか。しかし当該断簡を見る限り、「伊勢瀧原社十七番歌合」はそれだけで独立している感があり、それ以外の滝原歌合というのは、なかなか想定しにくいようにも思われる。この問題に関しては、結局のところよくわからない、としか言いようがない。

それから詞書の存在自体はよいとして、その付き方がまた不審である。なぜ3と5の歌にだけあって、残りの五首にはないのであるか。もつとも先の『後京極殿御自歌合』や『慈鎮和尚自歌合』にしても、必ずしもすべての歌に、詞書が見られるわけではないのだが、それにしても当該断簡の場合、詞書を伴う歌と伴わない歌との違いを、うまく説明し得ないのである。これをどのように考えるべきか。

こうした疑問はしかし、当該断簡が『諸社十二卷歌合』だったという可能性を、真つ向から否定してしまうほどのものでもないだろう。このような問題が、なお残っていることは認めた上で、以下もう少しだけ論を進めることにする。すなわちひとつの試みとして、今度は逆に、当該断簡に基づいて、『諸社十二卷歌合』を捉え直してみたいと思う。

まずはその規模について。当該断簡はもと十七番の歌合で、残りの十一巻もそれと同規模だったとすると、全十二巻で二百四番、歌数にして四百八首。それは松野氏の、

御裳濯・宮河両者歌合と「十二巻」の一巻ずつが等規模であるのは少々不自然だから、六社二巻ずつ（滝原の例からみて）計十二巻ではば御裳濯・宮河に数量的に見合う程度の規模（略）、例えば、一巻六番ずつ、十二巻で七十二番、これで、和魂を祭る本宮の歌合である御裳濯・宮河歌合と対照的な構成を有つということになる。

という推測の、約三倍の分量であるが、しかし決してあり得ない数字でもないように思われる。その場合、『諸社十二卷歌合』は必ずしも、『御裳濯・宮河に数量的に見合う程度の規模』だったわけではなさそうだ、ということになる。

それからその奉納先について。松野氏は『拾玉集』にいう「滝原」を、伊勢皇太神宮（内宮）に属する別宮のひとつ、滝原宮であろうとされた。滝原宮は『皇太神宮儀式帳』に「伊勢志摩両国堺大山中在。大神宮以西相去九十二里」と見られるものである。さてその上で、さらに続けて松野氏は、奉納先を示す「諸社」という語の定義について、

「滝原の下巻」とあるからには、「上巻」もあつたはずであり、別宮の一社に二巻を当てているということになる。ということは、「諸社」の内容がどのようなものであるかということを示しているといつてよい。「諸社」は、例えば俊成の「五社百首」の住吉・賀茂といった大社を指すのではなく、「慈鎮和尚自歌合」の日吉七社と

同様な、「伊勢太神宮関係の諸社」を意味するのである。

と論じられた。のみならずその候補として、

内宮七所別宮

荒祭宮、伊弉諾宮、月読宮、滝原宮、並宮、風宮、伊雑宮

外宮四所別宮

多賀宮、土宮、月読宮、風宮

といった「滝原宮と同格の別宮」を提示、またそれ以外にも「内外両宮の摂する社は数十社に上っている」とされて、これらの内から、「十二巻」という条件と結びつけてどれを比定したらよいのか、和魂を祭る内宮（朝日宮）と外宮（豊受宮）に対して、荒魂を祀る別宮が、御裳濯河歌合（内宮）・宮河歌合（外宮）に対して何らかの意味を有つものであるのか、など今の段階では不明というほかはないが、これらのどれかが十二巻の歌合を奉納する対象になったということだけは間違いない。

と述べられた。

この松野氏の推定は、『拾玉集』の「滝原」を、滝原宮と解したことからは始まっている。ところが当該断簡のそれは、同じ滝原でも「瀧原社」であって、すなわち松野氏ご指摘の滝原宮ではないのである。おそらく当該断簡にいう「瀧原社」は、多岐原神社（また「瀧原神社」とも）を指していよう。伊勢国度会郡三瀬村に所在し、麻奈胡神を祭神とする、皇太神宮の摂社のひとつである。⁽¹⁴⁾なお、先程から別宮といい摂社といっているが、両者はもちろん別物である。別宮とは「要するに、宮号を称する社であって」、「神宮の附属神社中第一に列せら」れるとされるもの。一方の摂社というのは、『皇太神宮儀式帳』所載の「官帳社廿五処」と、『止由気宮儀式帳』所載の「載官帳社名社十六処」

とを合わせた四十一社、もしくは「延喜式」巻四・神祇四「伊勢大神宮」に「大神宮所撰廿四座」及び「度会宮所撰十六座」として挙げられる四十社の総称であるという。¹⁵⁾

さて『拾玉集』の「滝原」が、滝原宮ではなく多岐原神社だったとすると、やはりその他の奉納先も、松野氏が提示されるような別宮ではなく、多岐原神社と同格の撰社であつたとみるべきだろう。今『延喜式』に従って、撰社のすべてを掲げておくと、次のとおりである。

皇太神宮（内宮）撰社

朝熊社 園相社 鴨社 田乃家社 蚊野社 湯田社 大土御祖社 国津御祖社 朽羅社 伊佐奈彌社 津長社
大水社 大国玉比売社 江神社 神前社 粟皇子社 久具都比売社 奈良波良社 榛原社 御船社 坂手国生
社 狭田国生社 多岐原社 川原社

豊受神宮（外宮）撰社

月夜見社 草名伎社 大間国生社 度会国御神社 度会大国玉比売社 田上大水社 志等美社 大川内社 清
野井庭社 高河原社 河原大社 河原淵社 山末社 宇湊乃野社 小俣社 御食社
仮に多岐原神社への奉納分を、上下二巻と考えた場合、松野氏も説かれるように、一社に二巻が充てられていたことになるから、残りは当然五社となる。その五社を特定するのは、現時点では残念ながら、不可能であるとせざるを得ない。ただ皇太神宮二十四社、豊受神宮十六社というその総数からして、両者が等分だったとは、いささか考えにくいだろう。おそらくは皇太神宮四社、豊受神宮二社という配分だったのではないか。松野氏の、

慈田が「外宮のは一筆にかきて」といっているのは、外宮の別宮が少かったから、という理由に拠っているのではないかと思う。

という推測は、撰社の場合も有効であると思われる。ともあれ『諸社十二卷歌合』の「諸社」というのは、具体的には別宮を含まぬ、撰社に限った謂であつたとみておきたい。

事実当該断簡が『諸社十二卷歌合』であつたとすると、何よりもまず、かつては存在すら否定されていた「幻の歌合」の現存が確認されるという点で、その資料的価値は計り知れないはずである。のみならず、西行の新出歌六首を含む（当然そういうことになるう）その所収歌の内容や表現、構成などを検討することによって、『諸社十二卷歌合』の性格の一端をも知り得るであらうし、そのことはまた、西行最晩年の思想の解明にまで繋がっていくかもしれない。それらの考察を、今後どこまで深めることができるのか、すべては当該断簡の精緻な読解と、ツレの博搜とにかかっているように。

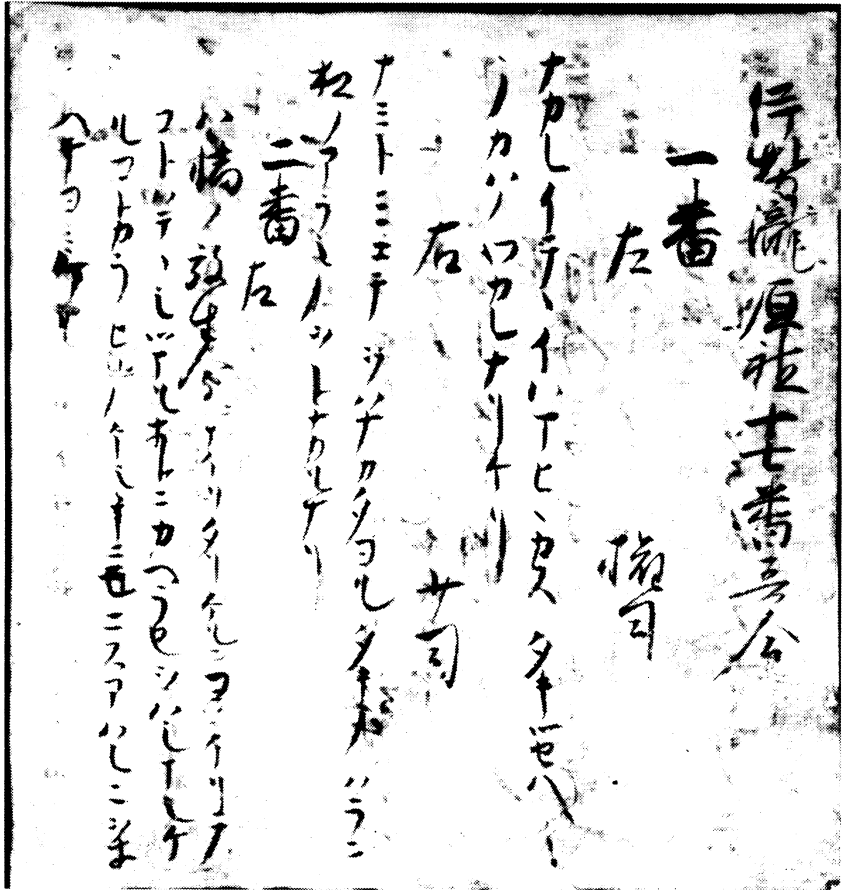
〔注〕

- (1) 『古筆手鑑大成 第四卷 藻塩草』（昭和六十年一月 角川書店）。
- (2) 『細川家永青文庫叢刊 別巻 手鑑』（昭和六十年二月 汲古書院）。
- (3) 田中登氏「古今集古筆切の本文的意義」（古筆切の国文学的研究）所収 平成九年九月 風間書房、初出『国文学 解釈と教材の研究』第四十巻十号 平成七年八月）。
- (4) 久曾神昇氏「古筆切影印解説 I 古今集篇」（平成七年七月 風間書房）。
- (5) 以下、和歌の引用は『新編国歌大観』に拠る。
- (6) 松野陽一氏「玄玉和歌集考」（鳥帯 千載集時代和歌の研究）所収 平成七年十一月 風間書房、初出『立正学園女子短大紀要』十四号 昭和四十五年十二月）。
- (7) 『国立歴史民族博物館蔵貴重典籍叢書 文学篇 第六巻 私撰集』（平成十一年一月 臨川書店）。
- (8) 国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムで披見。

- (9) 以下、伊藤氏のご論は『歌人西行』（昭和六十二年四月復刻 第一書房）に拠る。
- (10) 久保田淳氏『西行全集』（平成八年十一月第三版 貴重本刊行会）。
- (11) 以下、松野氏のご論は「西行の『諸社十二巻歌合』をめぐって」（『鳥帚 千載集時代和歌の研究』所収、初出『平安朝文学研究』第二巻第八号 昭和四十四年十二月）に拠る。
- (12) 伊藤嘉夫氏・久曾神昇氏編『西行全集 第二巻 文献叢刊』解題（久曾神氏執筆、昭和五十六年二月 ひとく書房）。
- (13) 萩谷朴氏『平安朝歌合大成』（昭和四十年四月 私家版）。
- (14) 『皇太神宮儀式帳』及び『延喜式』巻九「神名上」の記述に拠る。ちなみに現在の地図によれば、滝原宮の北方約三キロほどに位置するという。
- (15) 以上、阪本廣太郎氏『神宮祭祀概説』（昭和四十年三月 神宮文庫）。

【付記】

資料紹介の機会を与えて下さった杉谷寿郎氏に厚く御礼申し上げます。また本稿を成すに当たっては、浅田徹氏・高田信敬氏・松野陽一氏よりご教示を賜った。記して深謝する次第である。なお本稿は、平成十一年度文部省科学研究費補助金・奨励研究(A)「未詳歌集切の集成と研究」に基づく研究成果の一部である。

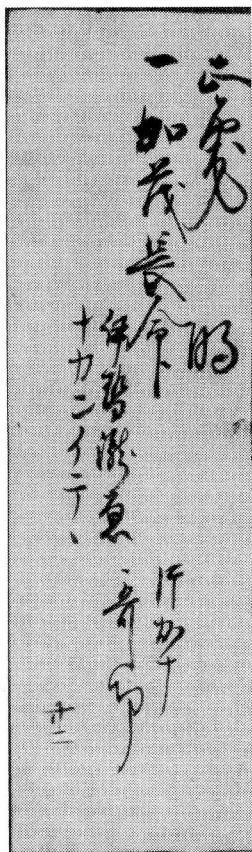


伝鴨長明筆『伊勢滝原社十七番歌合』断簡（オモテ）

ありてはミチノクミノサヒサハアツシ
 ニハノコミチハハ
 右
 アスノカキタシシノハハハ
 コトノワサリテハ
 三番
 月ミシヒタケクリケリ
 ケネテモナノウキスルイワケ
 カスミユケリスルイワケ
 石
 ヒサタノ月ミヤコノウケシ
 タチカクレハ
 言ま
 石
 モ、シキニルシツスノカスルノ
 ハヒシヤノケムリトシ、ミシ

伝鴨長明筆『伊勢滝原社十七番歌合』断簡（ウラ）

伝鴨長明筆『伊勢滝原社十七番歌合』断簡（久保木）



付属紙片